

研究会報告

富川理充研究員

今、トライアスロンが熱い！

～トライアスロン研究の最前線～

トライアスロンのワールドカップにも出場した経験を持つ富川研究員からは、その研究の最前線について発表がなされた。

トライアスロンは1974年に誕生し、日本においては1981年に鳥取県において開催された。トライアスロン（51.5kmがスタンダード）は現在、小学生の大会も開催されるようになり、2016年度からは国民体育大会にも正式種目として採用されることが決定している。

トライアスロンの研究論文は、1981年ころから発表されるようになり、主に海外において研究論文が増える傾向にあり、2011年に第1回目の国際学会が開催された。富川研究員は「トライアスロンのウェットスーツ」の研究を行ってきており、これまでの研究成果が発表された。また、ウェットスーツを着用してトレーニングすることにより、フォームが効率化される効果があることから、これからの展望として、ウェットスーツのスイムトレーニングへの応用が期待されることが紹介された。今後、その検証を進めていくとの結論にて発表が締められた。

相澤勝治

スポーツにおける研究と教育の橋渡し研究

相澤研究員は、性ホルモンと運動の関係に関する研究で高く評価されている若手研究者の一人である。まず始めに、骨格筋における性ホルモンの作用に関する研究について紹介された。加齢に伴うサルコペニア（筋肉量の低下）のメカニズムが示され、相澤研究員の研究成果をもとに、骨格筋における性ホルモンが産生されるというデータが紹介された。また、骨格筋の性ホルモンは運動によって増加する可能性が示され、運動習慣によりサルコペニアが予防できることが紹介された。

続いて、研究と教育における現代の課題として「橋渡し研究（トランスレー

ショナル・リサーチ)」の必要性が述べられた。「アメリカ版大学生物学の教科書」の冒頭には生物学の研究を一般学生に教育する意義として、「一般教養を高めて人間としての奥行きを高める」「その学生が専門とする学問に生物学の考え方・知識を導入して発展させる可能性がある」「文系の学生が生物学の考え方を学んでおけば、その学生が将来官界・財界のトップに立った時、バイオテクノロジーの最先端の研究者との間の意思疎通が容易になり、バイオテクノロジー分野の発展に貢献できる」と述べられていることが紹介された。これは、文系大学の本学における教養教育の重要な示唆となり得るものであろう。

橋渡し研究は、生命科学の分野が益々発展していく現在、その意義は益々大きくなってくると考えられる。相澤研究員は、専大の学生に対する体育・スポーツに関する最先端の生命科学の橋渡し研究として「大学体育におけるスポーツ医科学情報と教育の統合化」を明示し、発表を終えた。

両研究員の発表は、研究の最先端であることはもちろん、本学における学生教育やエリートアスリートの育成に結びつく視点が含まれており、今後の活躍が大いに期待できるものであった。

次回研究会は、野呂研究員と飯田研究員の発表が予定されている。 (了)